

(30) ハ ス(レンコン)

主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
腐敗病 (<i>Pythium</i> 、 <i>Fusarium</i>)	<p>①新植の時は健全種ハスを使用する。</p> <p>②掘取り期以外は湛水状態を保つ。とくに、砂質土壌では落水のため発病しやすいので注意する。</p> <p>③窒素の過用は発病を助長するので、肥培管理に気をつける。</p> <p>④トンネル栽培する。</p> <p>⑤早掘りすると発病が軽減する。</p> <p>⑥発病茎などはできるだけ除去する。</p> <p>⑦十分耕起して代かきし、残さは十分腐敗させる。</p> <p>【参考事項】 レンコンを切つて導管部が褐変しているのは<i>Fusarium oxysporum</i> (F菌)、導管部が褐変せず、紫黒色又は黒色で腐敗するのは<i>Pythium afertile</i> (P菌)によるとみてよい。一般には前者の発生割合が高い。 第一次伝染源は罹病レンコン、罹病茎葉などとともに土中などで越冬した菌糸 (F菌、P菌)、厚膜胞子 (F菌)、卵胞子 (P菌) などと考えられている。 灌漑水によって、罹病しているくずレンコンや土壌とともに病原菌が運ばれて侵入するため、初作地でも発病することがある。 病原菌は地下茎又は葉柄の傷口から侵入する場合と、地下茎節部から生じた吸収根の先端部から侵入する場合がある。 F菌の生育適温は27～30℃、最低温度は10℃前後、高温限界は33～36℃である。 P菌の生育適温は34℃前後、最低温度10℃程度、高温限界は40℃でF菌より高温を好む。</p>	登録農薬はない。
アブラムシ類	<p>①蓮田内や水路などに自生しているウキクサ、ヒシ、ホテイアオイ、コナギなどはアブラムシの増殖源になるので除去するとともに、蓮田内への流入を防止する。</p> <p>【参考事項】 クワイクビレアブラムシが主に寄生する。本虫はウメ、モモ、スモモなどの樹上に卵で越冬する。 3～4月頃、有翅虫が水路や水辺に自生する水生植物に飛来し、続いて5月頃、ハス(レンコン)や雑草に寄生して、10月中旬頃まで生息する。 ハス(レンコン)に対する加害ピークは、生育初期の5月上旬～6月上旬までの1か月間である。</p>	<p>①発生初期から農薬を散布する。 萌芽後間もない時期にアブラムシが多数寄生すると、初期生育が抑制され、地下肥大茎の発育も阻害されるので、初発生時の防除に努める。 5月上旬～6月上旬までの防除を徹底する。 (例) イミダクロプリド粒剤(アドマイヤー1粒剤)(クワイクビレアブラムシ) クロチアニジン粒剤、クロチアニジン水溶剤(ダントツ粒剤、ダントツ水溶剤)(クワイクビレアブラムシ) チアメトキサム粒剤(アクタラ粒剤5)(クワイクビレアブラムシ) フロニカミド粒剤(ウララ粒剤)(クワイクビレアブラムシ)</p>
スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)	<p>①地域の密度を下げるため、水田、用排水路などで、組織的に成・幼貝の捕殺や定期的な卵塊除去を行う。</p> <p>②用排水路がほ場内への侵入源になる場合は、入水口に6～9mm目合い程度の金網を張って侵入を防止する。</p> <p>③産卵後間もない卵塊は水中に落とす。産卵後半の灰褐色をした卵塊は捕殺する。</p> <p>【参考事項】 水路で越冬した貝は、4月頃から夜間に水中から出て、水路の壁面や雑草の茎などに産卵する。 水田内で越冬した貝は、代かき前に入水されると活動を始める。田植え後、水面上に出た茎や畦畔雑草、畦板などに産卵する。 卵は卵塊状に産みつけられ、鮮紅色ないし薄紅色で、1卵塊当たりの卵粒数は数十～数百個程度であるが個体差が大きい。ふ化するとすぐに水中に落下し、稚貝は約2～3か月で成貝となる。 水田が秋に落水されると土中に浅く潜りこみ、翌春まで越冬する。</p>	<p>①植付け前に農薬を施用し耕起する。 (例) 石灰窒素(石灰窒素55など)</p> <p>②発生初期から農薬を散布する。 (例) メタアルデヒド粒剤(スクミノン) リン酸第二鉄粒剤(スクミンベイト3)</p>